

■ PCN だより

PCN Volume 64, Number 3 の紹介 (その 1)

PCN 64 巻 3 号には外国からの投稿による Regular Article 6 本と Short Communication 1 本が掲載されている。いずれも質の高い内容であり、これらの抄録を和訳して紹介する。

Regular Article

1. Anti-BDV antibody responses in psychiatric patients: a long-term follow-up study

Alexander Heinrich, and Michael Adamaszek

Department of Neurology and Clinical Neurophysiology, Henriettenstiftung Hannover, Hannover, Germany

精神疾患患者における抗ボルナウイルス抗体価
——長期経過観察研究——

【目的】精神神経疾患においてボルナウイルスが病因となる可能性を示唆するデータはあるもののいまだ結論は得られていない。さらに、ヒトがボルナウイルスに持続的に感染しているか、あるいはこのウイルス感染を排除しているかも知られていない。本研究では精神疾患患者についてボルナウイルス抗体価の長期経過を観察することにより、ヒトにおけるボルナウイルス感染の病原性を明らかにすることを目的とした。【方法】統合失調症 (46 名)、気分障害 (19 名)、その他の精神疾患 (29 名) の合計 94 名のボルナウイルス抗体陽性者 94 名について 1985~2006 年の間、間接免疫蛍光法によりボルナウイルス抗体価の変化を測定した。長期経過については 36 カ月以上の観察が可能であった 46 名について検討した。【結果】46 名中 25 名 (54.3%) は抗体価陽性のままであり、21 名 (45.7%) は抗体価陽性から陰性に変化した。統合失調症では病初期の患者は進展した病期の患者と比較して低い抗体価を示していたが ($p=$

0.017)、抗体価が上昇したものの比率は病初期の患者の方に多かった ($p<0.05$)。安定期の患者と急性期の患者の間に抗体価に有意差を認めなかった。【結論】長期観察の結果は精神疾患患者の一部に一定の高抗体価が認められたことは、ヒトにおいてボルナウイルスが持続的に感染していることを示唆する

2. Plasma BDNF and tPA are associated with late-onset geriatric depression

Yanyan Shi, Jiayong You, Yonggui Yuan, Xiangrong Zhang, Hailin Li, and Gang Hou

Department of Psychiatry, Nanjing Brain Hospital Affiliated to Nanjing Medical University, Nanjing, China

血清 BDNF と tPA は高齢者うつ病と関連している

【目的】最近 BDNF (brain-derived neurotrophic factor) が大うつ病 (MDD) の発症に重要な役割を果たしていることを示す研究は多い。また tPA (Tissue-type plasminogen activator) は BDNF 作用を調節すると考えられている。本研究では高齢者うつ病における BDNF と tPA の変化とその臨床的意義について検討した。【方法】治療前 ($n=24$) と 6 週間の抗うつ剤治療後 ($n=24$) の高齢者大うつ病患者において ELISA 法により血清 BDNF 値と tPA 値を測定し対照群 ($n=30$) と比較検討した。うつ病の重症度はハミルトンうつ病評価尺度 (HDRS) により評価した。【結果】高齢者うつ病患者において治療前の BDNF 値と tPA 値は対照群と比較して有意に低下しており ($P=0.037$, $P=0.000$)、これらの値は治療により上昇する傾向を示していた。【結論】この結果は血清 BDNF 値と tPA 値は高齢者うつ病と関連している。高齢者うつ病における BDNF と tPA

の作用機序について今後の研究が必要である。

3. Low serum HDL cholesterol levels associate with long symptom duration in patients with major depressive disorder

Soili M. Lehto, Leo Niskanen, Tommi Tolmunen, Jukka Hintikka, Heimo Viinamäki, Tuula Heiskanen, Kirsi Honkalampi, Marja Kokkonen, and Heli Koivumaa-Honkanen,

Departments of Psychiatry, Kuopio University Hospital, Kuopio, Finland

血清中の低 HDL コレステロール値は大うつ病の長期症状持続と関連している

【目的】うつ病患者において血清高密度リポ蛋白コレステロール (HDL-C) 値との関連が症状の持続により変化を受けるかどうかについて検討した。【方法】うつ病患者 (n=88) と性別と年齢を一致した健常者群 (n=88) とに対して Structured Clinical Interview for DSM-IV (SCID) を施行し、うつ病患者については症状の持続期間を調査した。血清全コレステロール値 (TC), 高密度コレステロール値 (HDL-C), 低密度コレステロール値 (LDL-C), トリグリセリド (TG) を測定し、LDL-C/HDL-C 比と TC/HDL-C 比について検討した。【結果】症状持続期間の長い (3 年以上) 大うつ病患者では、健常者および症状持続の短い患者と比較して HDL-C 値が有意に低かった。年齢、性別、婚姻状態、体重増加、症状の重症度、アルコール使用、喫煙、身体運動、医薬品、非 HDL-C で補正した回帰分析では、HDL-C 値が 0.5 mmol/L 低下するとともに症状の持続期間が 2 倍に増加していた ($p < 0.05$)。【結論】この結果は冠動脈疾患のリスクである血清 HDL-C 値が、うつ症状の持続と関連していることを示唆する。

4. Polysomnographic findings in patients with posttraumatic stress disorder

Sinan Yetkin, Hamdullah Aydin, and Fuat Özgen
Department of Psychiatry, Diyarbakir Military Hospital, Diyarbakir, Turkey

PTSD 患者のポリソムノグラフィ所見について

【目的】本研究では他の精神疾患合併の有無により PTSD 患者の睡眠構造がどのように変化しているかを検討した。【方法】PTSD 患者 (24 名) と性別と年齢を一致させた健常対照者 (16 名) について 2 晩連続のポリソムノグラフィ検査を施行し睡眠パターンを検討した。患者群は純粋な PTSD 患者 6 名と大うつ病を合併した PTSD 患者 15 名であり、それぞれ健常者群と比較し、睡眠に関わる変数と PTSD 症状との相関を検討した。【結果】大うつ病を合併した PTSD 患者群は、健常者群と比較して、入眠困難、低い睡眠効率、全睡眠時間の減少、徐波睡眠の減少、REM 潜時の短縮を示していた。合併疾患のない PTSD 患者は、中程度の睡眠持続の困難、徐波睡眠の減少を示していたが REM 睡眠に異常を認めなかった。REM 睡眠潜時は驚愕反応の程度と逆相関しており、徐波睡眠は心因性健忘の程度と逆相関していた。【結論】本研究では PTSD 患者には、合併する大うつ病の有無にかかわらず、睡眠持続の困難と徐波睡眠の減少が認められた。徐波睡眠とトラウマの想起ができない事とが関連しているという事実はトラウマの記憶に睡眠が関与している可能性を示唆する。驚愕反応と REM 潜時との関係は、REM 睡眠の機序が PTSD 症状形成の機序と共通している可能性を示唆する。

5. A three-year follow-up study of the psychosocial predictors of delayed and unresolved PTSD in Taiwan Chi-Chi earthquake survivors

Chao-Yueh Su, Kuan-Yi Tsai, Frank Huang-Chih Chou, Wen-Wei Ho, Renyi Liu, Wen-Kuo Lin
Department of Nursing, I-Shou University, Kaohsiung County, Taiwan

台湾集集地震による PTSD 患者の症状を予想する心理社会的要因についての 3 年間縦断調査研究

【目的】壊滅的な地震 3 年後の PTSD 症状の縦断的な経過を予想するために、地震 6 ヶ月後のデータを用いて解析した。【方法】訓練を受けた精神科医により 16 歳以上の地震被災者 1756 名について Disaster-Related Psychological Screening Test

(DRPST) を用いて3年間評価した。【結果】地震3年後の時点において、当初のPTSD患者418名のうち38名(9.1%)に、当初の調査でそうでなかった者1338名中40名(3.0%)にPTSDが認められた。3年後のPTSDを予想する因子は、若い年齢、経済的損失、記憶/注意障害であった。【結論】被災6ヶ月後の背景、PTSD関連症状、PTSD惹起因子を調べることにより、地震3年後のPTSDの経過を予想することが可能である。

6. The relationship of alexithymia to pain severity, depression, and anxiety among patients with chronic and episodic migraine

Irem Yalug, Macit Selekler, Ayten Erdogan, Ayse Kutlu, Gulmine Dundar, Handan Ankarali, Tamer Aker

Department of Psychiatry, Kocaeli University, Faculty of Medicine, Kocaeli, Turkey

慢性間欠性片頭痛患者における痛みの程度、抑うつ、不安とアレキシサイミアとの関係について

【目的】慢性疼痛とアレキシサイミアとの関連を示唆する報告もあるが、片頭痛における痛み、抑うつ、不安とアレキシサイミアとの関連については不明である。片頭痛発作患者と慢性片頭痛患者について抑うつ、不安、アレキシサイミアを評価し、アレキシサイミアとこのような症状との関連について検討することを目的とした。【方法】片頭痛発作患者(165名)と慢性片頭痛患者(135名)について Beck Depression Inventory (BDI), State-Trait Anxiety Inventory (STAI), Toronto Alexithymia Scale (TAS) を施行した。アレキシサイミアの程度は、社会疫学的背景、片頭痛の家族歴、疾患の特徴(痛みの程度、発作の頻度、罹病期間)との関係について解析した。【結果】片頭痛発作患者と比較して慢性片

頭痛患者は抑うつ得点は有意に高かったが、不安得点とアレキシサイミア得点は高くなかった。両方の片頭痛患者ではTAS得点は年齢と教育歴と正の相関があったが、他の評価との相関は認めなかった。両方の片頭痛患者において抑うつと不安はアレキシサイミアと相関していた。【結論】本研究では慢性片頭痛患者は発作性片頭痛より重症の抑うつ状態にあることが示された。両方の片頭痛患者において抑うつと不安はアレキシサイミアと有意に相関することが示された。本研究から、片頭痛患者における抑うつ、不安とアレキシサイミアの正の相関が示唆された。

Short Communication

1. Transcranial magnetic stimulation for auditory hallucination in severe schizophrenia: partial efficacy and acute elevation of sympathetic modulation

I-Ching Lai, Cheryl C. H. Yang, Terry B. J. Kuo, and Kun-Ruey Shieh

Department of Psychiatry, Tzu Chi General Hospital, National Yang-Ming University, Taipei, Taiwan

重症統合失調症患者の幻聴に対するrTMSの効果

——部分的有効性と交感神経系の急性刺激効果——

反復経頭蓋磁気刺激法(rTMS)が統合失調症の幻聴に有用であることが報告されている。幻聴を有する統合失調症患者(n=8)に対するrTMSの効果と心臓自律神経機能(CAF)の作用について検討した。3名の患者では幻聴が50%以上軽減した。この際、rTMSの直後に交感神経系の指標であるLF/HF比(high-frequency powerに対するlow-frequency powerの比率)は上昇していた。さらに多くの症例についての検討の必要性が示唆される。

(文責:武田雅俊 PCN 編集委員長)